

## ザ・チャレンジド (the challenged)

向井 崇

子ども相談室 職員

東京カリタスの家、子ども相談室には、発達障がいやダウン症など発達に何らかの特異性のあるお子さんがたくさんいらしています。なかでも発達障がいとは、生まれながらもつ脳の器質的な障がいで、対人関係、コミュニケーション、想像性などに困難さをもっています。その背景には、全体よりも部分に着目しやすい認知的傾向や、音や光などに過敏に反応しやすいこと、見通しをもって物事を実行していく機能の弱さなど、様々な認知的な「違い」があります。発達障がいのあるお子さんにとって、このような見えない違いを抱えて生きていくことそのものがチャレンジに満ちているといえます。

それはご家族にとっても同じ事が言えます。障がいのあるお子さんを連れて電車に乗ったり外食をすることだけでも、とても大変なことです。まして日常生活のトイレや着替えなどにも介助が必要となれば、ご家族への負担は計りしれません。一般的に子育ては人生において最も大変な仕事の一つですが、何らかの障がいのあるお子さんを育てることはさらに難しいことなのです。我々にとっては当たり前の日常を営むことそのものが、チャレンジに満ちあふれているのです。

ところで、現在のアメリカでは、障がいのある方々をザ・チャレンジド (the challenged) と表現することが“politically correct” (政治的に正しい) とされています。つまり障がいのある方々は、チャレンジする使命を与えられた人達であるということが社会的な通念として存在しているというのです。handicapped (ハンディがある) や disabled (困難である) のように当事者の弱みに着目した言葉でなく、「チャレンジド=挑戦を受けている」というより積極的な言葉を使うことで、障がいの意味を捉えなおそうとする試みであるように思われます。

しかし、「障がい=チャレンジを受けている」と捉えなおしたところで、障がいのある方々やご家族の生きにくさが軽減する訳ではありません。実際に、当事者の方々から「障がい者=チャレンジド」と表現することに対してネガティブな意見も一方であります。なぜなら、そのチャレンジは一方向的に与えられたことであって、積極的に自分で引き受けたことではないからです。「私の人生に障がい児の親になるというシナリオはなかった」という親御さんの言葉が思い出されます。

また、ご本人やご家族が望まずに引き受けている困難さを「チャレンジ」という積極的な言葉に言い換えて良いのかという疑問もあります。「チャレンジ」という耳に心地よい言葉を使うことで、我々が障がいをもつ方々やご家族の生きにくさを見なくて良いようにするわけにはいかないのでしょうか。

ここで改めてもう一度、「チャレンジド」の意ここで改めてもう一度、「チャレンジド」の意味を考え直したいと思います。繰り返しますが、「チャレンジド」とは「挑戦を受けている」という意味でした。しかし、挑戦を受けているのは誰でしょうか？私は、障がいのある人やご家族だけでなく、「我々が」挑戦

を受けているのだと考えたいと思います。つまり、障がいのある方々やそのご家族と「共に生きていく使命を我々が受けている」のだと言えるのではないのでしょうか。

現代の社会には、まだまだ障がいのある方々にとって生きやすい世の中にはなっていません。社会には我々が感じている以上に、無理解と偏見が多く存在します。このような状況を放置したまま、一方的に当事者の方々に「チャレンジ」を求めることはできません。まずは我々の側が、障がいのある方々やご家族の生きにくさをかれらの視点から理解し、共に生きていく努力をする必要であるのではないのでしょうか。

このことは、「私達が如何に弱くとも、誠のカリタスを通じ、誠のカリタスにおいて、人々と勇気を持って共に生きることが出来ますように」というカリタスの家の祈りに通じます。私達子ども相談室は、発達障がいのある子ども達とご家族との共生を目指して、これからもチャレンジを続けていきたいと思えます。